

ト部たみの保育論に関する一考察

—『幼児の教育』の保育記録を手がかりに—

A Study about Childcare Theory of Tami Urabe: Through the Analysis of “Youjino Kyouiku” (Early Childhood Care and Education) Magazine Articles

清水 道代
Michiyo SHIMIZU

1. はじめに
2. ト部の保育記録にみるホリスティックな保育観
 - (1) つながり、つりあう生活と学び
 - (2) つながり、つつみこむ多様性と生の営み
 - (3) つながる、つづく教育
3. 考察
4. おわりに

1. はじめに

近年、就学前教育や保育に対する期待や要求が複雑化、多様化し、乳幼児教育を担う保育者の役割が益々重要になっている。また、質の高い就学前教育・保育を提供するためにより高度な保育者の専門性が求められ、その専門性を身に付けるための養成カリキュラムがどうあるべきかが問われているといえる。現在の幼児教育は、戦前の幼児教育を基盤として引き継がれており、各時代の社会状況やニーズに応える形で展開されてきた。これからの幼児教育や保育者養成の在り方を展望する上で、これまでの保育の歴史に光を当て、そこに生きた人々の実践から学び、これからの保育者養成に繋げていくことは非常に重要であると考ええる。

筆者は、「幼稚園制度の確立と保育者養成—帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所の取り組みに着目して—（青山学院大学教育人間科学部紀要第5号2014）」において、帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所の戦前期（大正15年～昭和17年）の養成カリキュラムと実践について考察を行った。その結果、

次のようなことが明らかになった。当時の養成教育は、常に子どもの姿を視野に入れ、子どもに即する保育を目指し授業が行われていたこと、そして、学生たちは毎日、保育現場に身を置き子どもの姿から学ぶとともに、授業を通して理論を学び、自分の体を通して実践するという往還的な学びの場が保障されていたことである。また、子どもの実態に精通した教員の子どもを語る実践的な指導が、それらの学びを支えていたということである。そして、帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所の養成教育は、OECDのSSⅡ（2006）が「ECECの質の改善と保証へのアプローチ」¹⁾において将来の展望として示している「ホリスティック」なカリキュラムと通じるものであることが明らかになった。

帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所の保育者養成は、東京府女子師範学校の校舎の一部を間借りする形で養成教育がなされており、養成教育に携わったのは、東京府女子師範学校の教員であった。中でも東京府女子師範学校附属幼稚園（以下東京女子附幼）の主任保姆であったト部たみは、附属幼稚園の保育者として実践する一方で、帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所の保育者養成にも携わっていた。そして、ト部の語る子どもの姿や実践的な指導により、多くの学生が学びを深めていたことが先の研究で明らかになっている。

ト部たみは、当時の東京女子附幼の実践について『幼児の教育』の中で、20回に渡り保育の記録を掲載している。記事のタイトルは表1の通りである。『幼児の教育』は1901年に刊行された『婦人と子ども』の継続誌であり、幼児教育の専門雑誌である。そこには、各時代の幼児教育の姿が著わされている。また、保育者によって記された保育記録は、その営みがどのように意味づけられていたかを知る重要な手がかりになると考える。

ホリスティックという言葉は、OECDのSSⅡ（2006）の中で「就学準備型」と「生活基盤型」との対比において「生活基盤型」として置かれているが、統一的な理論があるわけではなく²⁾その多様性がホリスティックなところともいえるのであるが、知識注入ではない、能力に焦点化しないという共通の認識はあるものの具体的な実践をイメージすることが難しい。

OECDのSSⅡ（2006）の示す、ホリスティックなアプローチの特徴は、①子どもの興味関心、生活を保育展開の出発点に置き、子どもの関心から導き出されたテーマについて共同で探求していく方法を取られること、そしてそれらは、子ども中心の全人的に育つプログラムであること【つながり、つりあう生活と学び】、②子ども同士や保育者、保護者との繋がりや関わりを大切にし、子ども自身が自分で考え自分の心で感じ、知る方法を学ぶ機会を保障するとともに様々な空間の広がりや多様性も重視すること【つながり、つつみこむ多様性と生の営み】、③能力に焦点化しない多元的な評価、とインフォーマルな評価（子どもの姿から学び）による質のコントロール（実践を省察する）がなされる共同体【つながる、つづく教育】であると整理することができる。

それでは、帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所のホリスティックな保育者養成を支えたト部たみの保育実践とはどのようなものであったのであろうか、その特徴を明らかにすることで実態に迫っていきたい。

表1 『幼児の教育』に掲載されたト部たみの記事

・「九月の幼児生活」	(1927) 第27巻第8号pp. 80～86
・「十月及び十一月の幼児生活」	(1927) 第27巻第10号pp. 13～21
・「十二月の幼児生活」	(1927) 第27巻第11号pp. 38～44
・「一月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 1号pp. 23～30
・「二月及び三月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 2号pp. 31～40
・「四月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 3号pp. 64～70
・「五月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 4号pp. 32～42
・「六月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 5号pp. 30～38
・「七月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 6号pp. 20～30
・「保育手帳から」	(1928) 第28巻第 7号pp. 49～54
・「九月及び十月の幼児生活」	(1928) 第28巻第8-9号pp. 69～74
・「一年の先生とお話しての感想」	(1928) 第28巻第8-9号pp. 97～102
・「十一月の幼児生活」	(1928) 第28巻第10号pp. 31～38
・「十二月の幼児生活」	(1928) 第28巻第11号pp. 59～66
・「一月の幼児生活」	(1928) 第28巻第12号pp. 44～46
・「入学以前における幼児の数的生活（一）」	(1929) 第29巻第 1号pp. 29～44
・「二月の幼児生活」	(1929) 第29巻第 1号pp. 57～59
・「三月の幼児生活」	(1929) 第29巻第 2号pp. 38～40
・「入学以前における幼児の数的生活（二）」	(1929) 第29巻第 3号pp. 10～15
・「入学以前における幼児の数的生活（三）」	(1929) 第29巻第 4号pp. 22～26

2. ト部の保育記録に見るホリスティックな保育観

ト部の保育記録は、子どもの姿やエピソードを記述した部分と、ト部自身の保育観や子ども観を語っている部分とがあるが、本研究ではト部の語りの部分に注目し考察する。

(1) つながり、つりあう生活と学び

①【五月の幼児生活（第28巻第4号）から】

生活全体が遊びである幼児にとっては、子どもをよく遊ばせること、言い換えればその本能の醇化即ち幼児の生活をより良く発揮せしめる事が教育である事は、今更申すまでもないことで

御座います。特にその精神生活は主として感覚の世界に限られている此の時代は、感覚の練習が最も必要な事で、私共はいつも子どもの本能活動の現れ、その傾向、その種類等に注意しどんな感覚練習が行われているか、どんな働きに最も興味を持っているかという点を考察してその指導に工夫しなければならないと存じます。つまり子どもにとって一番興味ある事は、多くその心身の発達の為に練習の必要ある事なのでございます。・・・中略・・・

危なくない様、けがのない様との心配のみ重んじられていたせい、自由遊びの他は先ず所詮お遊戯ぐらいでその幼児相応の最も適当した運動遊戯の方面は殆ど考究されていなかった様に察せられます。・・・中略・・・どこまでも幼児の身心の発達に心して、眞の生きた子どもに接しながら、いつか知らず知らずの間に大人のあたまで作り上げた子供として見過ごす様の事のない様、意をもちいたいと存じます。

子どもにとって遊びが最も重要な学びの機会であるという立場に立ち、感覚の世界に生きている子どもは、身体全体で感じ取り、全身を通して環境と関わっている存在としている。そして、興味関心も基づく主体的な遊びが十分に保障されることがいかに子どもの成長発達に重要であることを認識している。また、子どもの本来性を信じ、育ちゆく力の素晴らしさを感じながら子どもが何を感じ何を体験しているのか、今をしっかりと見る事、そしてそれによって指導方法を工夫していくこととしている。大人の枠組みや価値観を問い直すことが重要であり、そのことが、子どもにとって必要な経験を十分に保障していくことにつながるということも指摘している。

②【九月の幼児生活（第27巻第8号）から】

保育五項目を分化的に時間的に配当して取り扱うのではなしに、子供とともに遊んでいる間に、所期の目的につき進めていかねばならないものと思います。従って幼児の遊び即ち生活そのものが保育の教材となるのであります。・・・九月の生活（主要材料）とは、教育的に扱う主な生活事項を凡そに配列しておいて、言わば生活暦というもので、大体これにより教育を進めていくものであり、・・・こう表しても是は極一般的なものでありまして、私共はいつも幼児一人一人を教育してゐるものであります以上、各個人の要求する学習の題材が、時に臨み機に應じて殆ど豫期出来ない様なものが出てくるものである事を考へ、それに最も適當の處置方法をとる事が眞の保育即ち教育である事を忘れてはならないと存じます。それらを記録して保育の資料反省材料とする事も亦大切な事と思ひます。

保育項目を時間割的に分断するのではなく遊びを通して、生活を通して、保育すること、そして生活のすべてが教材であるという立場に立っている。毎月の主要材料は、大まかなテーマであり、それによって保育を進めていくが、その通りにすべてが行くわけではなく臨機応変に子どもに即する保育を再構成していく必要性を示唆している。また、記録により保育を省察することの重要性も述べている。

表2は主要材料の一例である。それぞれのテーマは、季節や自然、地域や伝統文化など多様な題

材が用意されており、時間、空間、出来事、精神など様々なバランスを取りながら子どもが全人的に育つことが期待されている。それぞれの生の営みは、つながり合い、かかわり合いながら、自分に気づき、周りに気づきながら一人一人がかけがえのない存在となっていく。

表2

十一月の主材

- | | |
|--------------|-------------------------|
| ○冬の支度（寒さの準備） | ○飼育動物或は花壇の世話 |
| ○お正月を待つ遊び | ○遠足、戸外保育 |
| ○七五三のお祝い | ○十一月の景色（町、園庭、田園、天候、季節等） |
| ○開校記念日 | ○渡米人形送別（特に本年現れしもの） |
| ○十一月の誕生会 | |

(2) つながり、つつみこむ多様性と生の営み

①【十一月の幼児生活（第28巻第10号）から】

自由遊びの間に、或は談話其の他の保育の前後に、幼児の印象深いと思ふ生活の発表をさせる事を全児に試みて居ります。そのためか保姆の方から話を要求せずとも、幼児が自発的に色々の機会にお話をし、又それも最初は二三人なのが第一学期終わりには半数ほどになり、第二学期以後終わり迄には殆ど全体に近い子供が自由発表をするようになる事も愉快でございます。

子どもたちは日々の生活の中で、感じたこと、考えたこと、感動したこと、発見したこと、驚いたことなど自分と対話しながら経験の内容を語り、周囲の子どもたちとも対話する。同じような感じ方や自分とは違う世界も共有し、それぞれの存在を肯定的に受け止めていくとともに、自分自身も受け止められる場が形成されている。

②【入学以前に於ける幼児の数的生活二（第29巻第3号）から】

即ち文字教育以前の教育として又教育以前の教育として、あらゆる外界事象事物につき正しい観察をさせ、観念の内容を正しく且つ豊富にさせる事は大切な事です。ここに幼稚園に於ける観察科は誠に意義のある事、従って真當の指導を心すべきものと存じます。…中略…一般的に兎角實物を早く離れようとする傾向がありますが、これが順調にそうなった時は当然の事として、ただ内容のない空な数詞を取り扱いは「空」で数えることは出来ても實物に就いては正確に数えられない場合を多く来たし、数観念養成の上に良くない影響があります。子供が数詞が確實に数観念と結合していない間は、たとえ見かけはよく数えられるようであっても「空」で数えさせないことが大切であります。

数字や文字を機械的に教えるのではなく、子どもの興味関心から具体的な観察を通して、あらゆ

るモノ、人、出来事と真剣に向き合い、対話することで周囲の世界を理解していく。そのことが、モノの本質も見抜く目や様々なことを知る方法を学び、探求心や創造性を養っていくとしている。一般的に早く大人に近づけようとするが、子どもには子どもなりの感じ方学び方があり、子どもの世界に寄り添った豊かな保育環境を用意することの重要性を指摘している。また、身体を通して学んでいくことの大切さも示している。

③【七月の幼児の生活（第28巻6号）から】

五月の初めには幼児の各家庭に生活調査として、①昨今はどんな方面に最も興味を持っているか②それはいつ頃からいつ頃までか、何の影響と思われるか③子共の興味をどんなふうに扱ったか④日常のしつけについて⑤家庭で使用する遊び道具、絵本など⑥幼稚園への感想（を調査している一筆者加筆）・・・家庭と幼稚園の連絡の実際として、なるべく母親の送り迎えを主とする様、やむを得ぬ都合のものは少なくとも月に一二回は母親自身園をのぞき保母はせめて立ち話でなりとも、保育上の打ち合をしたいという心持で、殆どそれが実行されています。けれども又時々此の様に全般に渡って回答を求める事を致しますと、私共の参考資料を得る事は勿論として、かなり家庭への刺激を提供するよすがとなるのを感じます。従ってそれが子供達の生活の上によい影響を来す事も嬉しいことでございます。

家庭調査というものを通して、家庭での様子を日々の保育に反映させるのは勿論であるが、このことを通して、母親と繋がり、家庭生活と繋がることで、家庭生活をより豊かにしていこうとするところに価値を見出している。家庭と共に子どもの成長を願っていく姿が見えてくる。また、毎年、12月は「玩具祭り」という行事を行っており、そこでも家庭の親の協力を得て、楽しかった一年を共に振り返り、子どもが成長していく喜びを共有するとともに、前後の生活をより豊かにするものとなっている。表3と表4は卜部の記した生活記録である。「生活記録は項目だけを書きだしたもので、その間の保育の生命の流れのいきかひは現はされませんが記す事に致します。」としている。項目だけを見ても自由遊びを中心に据え、様々な人、モノ、出来事に会い、多様な対話の場が生まれていることが伺える。卜部が「保育の生命の流れ」と表現しているように保育が機械的ではない、有機的な生命の営みであったことも想像できる。

表3 (『幼児の教育』第27巻第8号p.82)

曜 週	第一	第二	第三
1	始業式 震祭記念式 ――小学校庭 式後遊戯室に於て休中の状況を 話合ふ。ピアノをきき又は唱歌 遊戯をして楽しみあふ。	自由遊び(各運動具による、積 木、本よみ、絵、談話等 草取 り)(雑草、虫類、蟬、休中に 咲ける花等の観察) お話「幼稚園が始まる。」 「幼児の話」(休中の話) 蓄音機 をきく。	雑草抜き、花壇手入れ、夏休み 中のおみやげ(絵手技等)を室 のまはりにならべしめる。 幼児のお話(休中のつづき) 唱歌遊戯復習
2	自由遊び(昨日の生活発表)(活 絵等による) 園外散歩 傳通院銀杏寺付近 (蟬の声をきき蝶蜻蛉を追ふ) お月見の支度のこと。	自由遊び(お月見の支度に及 ぶ。)二の組を見て粘土にて「イ モ、ナス、瓜果等」を作る。展 覧会(於小学校)をみにいく。 (唱歌遊戯(復習) 月見の兎 一段新授	自由遊び(お月見のかぎり) (実物の果物、野菜を膳にそな へ薄、秋草をかざる) (それらの観察 絵をかくも の 自分の粘土をならべる お話「お月見のお話」 唱、遊同前
3	由遊び (砂場掃除、砂ならし、水遊び、 笹舟づくり) 談話(日曜の話) ボールさがし(楽曲により) 唱、遊同前	自由遊び 九月生れ誕生会の支度のため絵、 手工をせる二の組を見る 粘土製作(自由) ボール投げ 唱、遊同前	二の組の手技をみて「家作り」 に入る。 絵、切抜いて立てる お話「なかない鈴虫」 なく鈴虫のうたをきかしむ、 唱、遊同前 自由遊び 砂場、蟻の幼虫の観 察
4	由遊び 折紙、切絵、積木 日曜の話、お彼岸の話(絵と談 話) お弁当の楽しみ 籠まり、ボールさがし、ジャン ケン遊び等 唱、遊同前	外保育 大塚東京高師校庭小石川窪町小 学校へ 山、池、樹木、花園、運動場、 児童生徒の運動、建物、設備、 家畜鳥類、其他の観察 (明日は秋季皇霊祭の事)	自由遊び 校内散歩(観察) リレー走幅跳びのまね マラソン、バスケット お話「黒のお客様」 絵「お話の中の好きな動物」 唱、遊同前、他の練習

表の上、第一第二は曜日を表し、右は1週2週を表している実際は五週目の二日程度が余るが紙面の都合上、4週の中に書き込んでいる。

表4 (『幼児の教育』第27巻第8号p. 83)

六 第	五 第	四 第	曜 週
自由遊び 汽車ごっこ ボール遊び 絵、(休中に関するもの。) 室にかざりし鑑賞 唱歌遊戯復習	自由遊び 水遊び、積木、手工、絵、 ままごと 校内散歩 (とんぼ、 蟻其他の虫類、電線工事、板塀校 舎等の修理) の観察 スキップ練習、唱歌、遊戯	自由遊び (雨雲、雨上り、向日葵、梨、桃、 いちじく等の実の観察) 談話 (人形の旅行) 続いて絵に入 る。各児の話 (つづき)	1
自由遊び 展覧会をみにいく 帰りに絵にかく (人使□汽車多し) 唱歌 (月夜の兎二段) 遊戯 (同上一段) 其の他の復習	自由遊び 鎌川神社参拝 (祭禮の後の日 近くのS家の庭園に遊ぶ 虫類の其他の観察 運動具類の使用 遊戯	自由遊び (砂場、ままごと等) お話「月の井戸」ゆうべのお月様 の話保母幼児語りあふ。絵にかく ものあり、切紙にするあり、手技 に入る。凡ておみやげとす 久堅 町通り祭禮の町観察(十月十一日) 祭禮氏神様の話 月夜の兎一段練 習	2
自由遊び 水たまり、赤蜻蛉追ひ、赤蜻蛉 観察、トンボの話 (自然科の 話) トンボ作り (キビガラ細工) 唱歌 鈴なし鈴虫 二の組の家かざりをみる お彼岸の話	自由遊び (手技、小積木、誕生会開会) 挨拶、答禮、贈物 (手技) 唱歌、 談話、本読み、遊戯等 自由遊び	自由遊び 由遊びよりつづいて昨日のつづき の「家作り」をなす。 絵、切紙、キビガラ等 (二の組の製作をみる) 唱、遊 鈴なし鈴虫新授 其他同前	3
唱歌、遊戯、既習のもの練習、ス キップ 談話 秋の話、夏と秋、春と秋、 九月終わりの話 自由遊び (同前)	自由遊び 雨中の往来観察 雨の日の通園について談話 雨具雨衣着替競争、送り迎えごっ こ お話「雷様の太鼓」 嵐、夕立の話 (休中の思井では なし) 唱、遊同前、	散歩 雨上り、雲、水たまり、日、空等 観察 自由遊び 積木、電車遊び 汽車遊び切符作り、カバン作り 九月分の身体検査	4

(3) つながる、つづく教育

①【一年生の先生とお話ししての感想（第28巻第8号）から】

よく幼稚園を経て来たか否かによって小学校に於ける成績を問題にする事があります。是は尤も大切な事と存じますが、私は幼稚園に居た子供故にすぐ点数表に現れた成績が良くあるべきものと定めてかかる考え方は如何かと思います。

②【保育手帳から（第28巻第7号）から】

眞の子供を知り、本當の幼児を育てようと力める私共は、常に学者の教えを学ぶと同時に、絶えず幼児そのものから学ぶべきを一刻も忘れてならない事は申す迄ありません。どんな心理学書にも教育書にもあまり見られない實例や教訓は、子供と毎日を送る私共のみに豊富に恵まれて居ります。

①の記録からは、子どもを可視化できる部分だけであるいは、ある側面だけを点数化し評価することに違和感を感じていることが伺える。また、幼稚園に行ったらそのような能力を期待され幼稚園で子どもの経験している学びや育てている様子が理解されていないことへの疑問でもある。そして、②が示すように、大人の目線では本当の子どもを理解することができないこと、常に保育者は子どもから学ぶことを忘れてはならないこと、どんな学術書よりも真実の答えは子どもの中にあること、その子どもたちに教えられ保育実践は支えられていることが示されている。ト部の子どもへの愛情と敬意が感じられる記述である。

①【一月の幼児生活（第28巻第1号）から】

色カード遊びについて・・・

なほ此の歌は一から十迄の順計及び逆計を自然のうちに知らせて居ります。子供の喜ぶのは歌いつつ自分の順番をまち、自分の番の来た時、すはこそと動きたい心持を十分に満足させることの出来る處にあると存じます。そして数生活に目覚め初めた幼児に、或は数の環境を作り出すためにも趣ある材料と存じます。但し是によって一から十迄の順計逆計を教え込もうとして、歌の気分を無視して強いて計算に入ったりするのは、私は大嫌いでございます。といって幼児の数生活指導については充分考慮と計画をもって扱ふ事は決して忘れてならない事と存じます。

②【入学以前に於ける幼児の数的生活（第29巻第1号）から】

子供の教育は尋常一年に入学して算術、国語と教科目を取り扱われてその学習が初まるものと思ったり、或は又幼児が自由に遊んで居る生活の中に豊富に出てくる問題に気付かずに過ごしてしまっておいて、さて尋常一年に入学する直前に、かなり無系統な数と文字と一斉教授をするといった話も耳にする事がございます。さうなると何もかまはずにほうり放しにしておくより一層心配な事の様にも思われます。是等に就いては家庭及び幼稚園の特に意を用ふべき事で

あると同時に、その幼児生活の連続でありその成長発展である学校教育の立場として、最もよく過程を知り出発点を知って、順調に正しい進展を期さなければならないと存じます。

①からは、子どもの経験している内容、心を動かされている瞬間を捉え、教え込みではなく、あくまでも環境を通して、子どもは学ぶ主体として子どもの世界を大切にしながら、子どもが数と出会う生活をデザインしていることが分かる。教材の豊かさだけではなく、扱い方も重要であり、子どもの本来性を無視した扱いはあってはならないと感じていることが分かる。また、②からは、教育は小学校以上の教育のみと思われたり、幼児が幼稚園で経験している豊かな学びや成長に目を向けることなく、小学校の準備教育として子どもに一方的に教え込むことは、放任よりもっと問題であること、なによりも家庭教育とも、小学校以上の教育とも子どもの育ちのプロセスを共有し、連続性をもって支えていくシステムを構築していくことの重要性を示唆している。

3. 考察

本研究では、帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所のホリスティックな保育者養成を支えた卜部たみの保育実践とはどのようなものであったのかをホリスティックな保育の特徴である【つながり、つりあう生活と学び】、【つながり、つつみこむ多様性と生の営み】、【つながる、つづく教育】という3つの視点でみてきた。

卜部の実践は、子どもにとって遊びが最も重要な学びの機会であるという立場に立っている。子どもを中心に置き、子どもの主体性、多様性を大切にし、身体感覚を通した学びを保障するものであった。また、子どもの本来性を信じ、育ちゆく力の素晴らしさを感じながら、子どもの経験している内容をしっかりと見ることで、保育を構想していくものである。また、保育を時間割的に分断するのではなく、子どもの興味関心から基づくテーマをもとに展開される保育は、自分自身ともつながり、他者ともつながり探求しながら様々な世界と折り合いをつけていくものとなっていた。

そして、家庭や地域社会、自然や伝統文化などとはつながり合い、物の本質を見抜く目を養うとともに、生きること、知ること学ぶことの喜びを実感していく生命に触れる体験が保障される保育であった。子どもから学ぶこと、常に当たり前の前提を問うこと、自分の保育を振り返ることを通して、子どもの本来性にコミットしていく保育実践であったといえるのではないだろうか。卜部が語る保育実践や具体的指導は帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所のホリスティックな保育者養成を支える要因の一つとなったといえるであろう。

4. おわりに

成田（2012）は、ホリスティックな教育について、①人間（じんかん）・時間・空間・事物・情報・精神などあらゆるものとつながりあう気づき【つながり】、②論理と直感、心と身体、自主独立と相互依存、知の様々な分野などとのバランスをとる【つりあい】、③学んだ知識や概念、多様なリテラシー・スキルを知・心・身体性の中に取り込み【つつみこみ】、④それらの＜つりあい＞＜つつみこみ＞＜つながり＞への気づきを通して、自己変革と社会変革への社会参画や行動を引き出す、持続継承的な教育のことである【つづく/つづけること】³⁾としている。このことからト部たみの保育はホリスティックなものの見方、考え方を志向するが実践であったといえるのではないだろうか。今後は、ト部の実践と附属小学校との接続がどのようなものであったのか、また、そのことと養成教育とはどのように繋がっていたのかを明らかにしていきたい。

<註>

- 1) OECD (2006) Starting Strong II : Early Childhood Education and Care
- 2) 吉田敦彦（1999）『ホリスティック教育論』日本評論社
- 3) 成田喜一郎（2012）「次世代型学校組織マネジメント理論の構築方法―「水の思想・川の組織論」の創造過程―」『東京学芸大学教職大学院年報』第1集.pp.1～9